

を持ち、半袖にして腰部までに終る上衣を纏ひ、その上に胸高に帶を結び、裾は甚だ深く折返してその部分が膝を覆ふ迄に至つてゐる服制は就中當代の文殊像中に見ること最も多いもので、類似の一二を舉ぐれば西大寺文殊堂本尊、仁和寺金堂の像等がそれである。騎獅の形は云ふまでもなく騎象の普賢と相對する古來の制であるが、之に優闡王以下の眷屬を添へた所謂渡海の形も甚だ廣く、此像は或はその一であつたかも知れぬ。唯本像に見る長面にして特に鼻梁の長き一種の相貌、寶髻を立てずして一種獨自の結び方を有つた髮形等は特にこの像に著しい宋式の影響とすべく、或は細く高き平行褶の手法もその一に數へられる。持物に至つては今兩手共に之を失ひ、特に右手先をも缺失してゐる。當代の文殊に普通なるものは右手劍、左手梵篋であつて、梵篋は蓮莖上に置かるゝ事多きも、また卷を掌中に握るもあり、本像の手相よりすれば後者の場合と判ぜられる。但し畫像の場合、特に宋様を直摹せるものに於ては右手は多く如意を持つが、この制未だ彫像にも行はれしや否やを知らぬ。

書

評

像、獅子共に材は檜にして玉眼を入れる。像の底面は全く板を以て蔽はれて木寄を知り難いが像を手にして極めて輕きを覺える。内割極めて大なる爲であらう。手法は明快にして軀肢の釣合、衣文の疊み、獅子の形に繁褥苦澁を示さないが、概して強さに缺け、印象の弱きを見る。蓋しその像容、手法何れよりするも鎌末の一作たるを動かし得ないものである。着彩はいま像、獅子共に暗赤褐の一色に塗られ、僅かに獅子の口の中にのみ朱がある。之等は恐らく後世の補彩にしてこの種の宋風を受けた鎌倉後期以降の彫像の常として當初は粉溜彩色像であつたと想像される。文殊の臺座と獅子の胴部に突出する鐙は金彩であるが共に後補、獅子の方臺は當時の普通の制を示すが之また何れの時にか改作されたものかと思ふ。缺損せる部分には文殊の左右の袖先、及び右手首、獅子の上顎部等が數へられる。

因にこの像は岩城家繼の寄進にかゝると云ひ、いま藥王寺假本堂の本尊として祀られてゐる。(渡邊)

東方學報

東京第六冊

本號は特に東方文化學院東京研究所長服部宇之吉博士の古稀を記念して編纂せられたもので執筆者無慮三十三、洵に當研究所の業績の駁々たる跡を窺はしむるものとして慶賀に堪えない。例に従つて之等のうちより特に美術に關係深き二三を擧げて簡單なる紹介を試みて置く。

「文姬歸漢圖」に就いて

鳥居龍藏氏

ボストン美術館所藏の同圖卷に對する風俗史的考察で、本圖を以て契丹竝に北宋頃の風俗を徴すべき重要な一資料としてその記述を試みられたものであ

る。直接な繪畫史上の所論ではないが斯の方面にも參考すべきものあるは云を俟たない。

燉煌本唐譯白傘蓋陀羅尼經

松本榮一氏

スタイン氏將來の佛頂曼荼羅の周圍に書寫してある諸陀羅尼經中に見る本經が唐代の書寫に係りつゝ元代に至つて西藏經より譯出せられたこの經の一本と相近いことを指摘してその全文を對照的に掲げて居られる。主とする所はこの特殊な一本の紹介に在るが延いて氏の研究に係る唐畫に對する西藏影響の問題の一面の資料として傾聴に値する。

北鎮廟の建築

竹島卓一氏

書

評

滿洲國醫巫閭山の同廟（五鎮の一）の調査である。本廟は創建甚だ古きに拘らず現存の建築は多く清朝の改築に係り僅かに碑中に元代迄溯るものを見ると云ふが、なほ山鎮の詞廟としての規模の大なると行宮の遺構のよく今日に在る例として注目すべき所以はこの所説に甚だ明かである。平面、圖版の寫眞等も固より氏の製作であらう。

支那出土の有双車軸頭に就いて

駒井和愛氏

題名の車軸頭の遺品を挙げ、その用途及び使用せられた時代を説いて之を戰國に於ける所謂銷車の装設たるべきを考定せられたものである。

漢代に於ける連木文とその西方への流傳

江上波夫氏

漢代畫象石中より題名の樹木文を採り、それがかゝる樹形を祥瑞の徴とする事ありしに基くを説き、延いてその類例が西紀四五世紀の埃及及び其他の西方に存することを指摘して之を東方よりの流傳なるべしと想像されたものである。

京都五山建築に現はれたる支那建築手法

飯田須賀斯氏

京都五山即ち天龍、東福、相國、建仁、南禪諸寺の建立當初の状態とその推移とを明らかにして之を大陸の禪刹に比較を試みたものである。唯今日殆んど全く當初の建築を失つてゐる之等諸寺の複原は多くはその配置、平面に止つて構架、裝飾の細に及び得ないが、なほ諸寺の大體と且つ再建等の推移の間の支那風の移入をもよく明らかにされてゐる。

以上のほか原田淑人氏の支那古代簡札の編綴法の所論、中川徳治氏の滿洲漢代遺蹟の主として地理的な研究等があるが、之等は美術考古學にはやゝ遠きものとして紹介を省く。（渡邊）

假綴四六倍 本文八四二頁 圖版コロタイプ其他二三葉 挿圖網版 昭和十一年二月十一日 東方文化學院東京研究所發行 特價五圓

佛像彫刻 明珍恒男

佛像修理の事に與つて多年の経験を積んだ著者が、技術者の立場から佛像彫

刻を説いたものとして、本書は通途の美術史家の著述に比較して甚だ異色を持つてゐる。これは嘗て昭和六年二月より昭和八年八月に至る間雑誌「史迹と美術」に連載された「佛像講話」に若干の補訂を施して一篇としたものであつて、著者の繰返し辯ぜられる如く、技術者の側より説ける初學者への手引草である。此方面の好著に乏しき今日、本書の出現は固より歓迎せらるべきであり、著者の企圖する所も略果し得てゐると思ふが、吾人が特に本書に於て多とすべき點は、その総合的記述たる點よりも寧ろ斷片的に隨所に散見する所謂「佛像を手掛けた者の體驗」であつて、技術者にして初めて言ひ得べきもの、又技術者の口から説かれてこそ權威あるものとなるべき異色ある見解が、本書には豊富に盛られてゐるからである。例へば飛鳥時代の樟材彫刻に關する觀察（本書五一頁）奈良時代末期より平安朝初期にかけての木彫の隆盛に關する見解（本書六一頁）等固よりかくの如きことは専門家の間に於ては既に考へられてゐることであらうが、吾々は斯人の言にして甫めて之に耳を傾ける價值を持つと思ふ。

元來啓蒙的な概説を手極よく纏める爲には、一局部に偏せざる廣き視野と、整然たる學的體系とを素地として之を咀嚼消化した老練の學徒にしてよく成し得るのであつて、吾人は本書がその理想に照らして稍足らざる感あるを訴ふる前に、斯道の専門學徒の手によつてこの方面の努力が拂はれなかつたことを、換言すればその仕事を果すには畑違ひの技術者の手によつて先鞭を着けられたことを憾としたい。著者の本領とせられるゝ所は、又吾々の領を引いて待つ所のものは、本書に於て片鱗を示された所の遺品に關する精細周到なる技術者としての觀察を、素材のまゝで結構であるからもつと豊富に提供せられんことである。（正木）

菊版 本文一二五頁 圖版網目版アート紙刷（口繪共）二四一圖 昭和十一年三月
スマカケ出版部發行 定價四圓